

カトリック教会の性的虐待諸事件と 芸術諸分野に見られるその表象について

安 田 静

はじめに

1909年から1929年まで、セルジュ・ディアギレフ (Serge Diaghilev)¹⁾ が主宰し、ニジンスキーら伝説的なダンサーたちを軸にパリの観客を熱狂させて、歴史的・画期的作品を次々に発表したロシア・バレエ団 (Les Ballets Russes) は、2009年に創立100周年を迎えた。この年、世界各地でこのバレエ団のオリジナル作品や関連作品の再演・蘇演、あるいはゆかりの品々を集めた展覧会やシンポジウムなどが催された。

同年10月²⁾、ロンドンのサドラーズ・ウェルズ劇場 (Sadler's Wells) は “In the Spirit of Diaghilev” と題し、4人のコンテンポラリー・ダンス若手振付家³⁾ に新作 (短編) を委嘱して、ディアギレフへのオマージュを捧げる公演を行った。

この公演はそのまま約1ヶ月後にパリのシャイヨー宮でも上演された。4つの作品はいずれもフランス初演であったが、中でもプログラムの最後を飾ったハビエル・デ・フルトス (Javier De Frutos) の “Eternal Damnation to Sancho and Sanchez” (2009) は、ディアギレフのロシア・バレエ団が1913年の『春の祭典』初演時にシャンゼリゼ劇場で起こした大騒動を想起させるほどの、激しいプーイングの嵐を巻き起こした。というのも、デ・フルトスの作品に登場するのは薄水色の僧衣をつけたカトリックと思しき神父達であり、しかもその神父達の長らしき年かさの (体重の嵩も標準以上の) 男性は、修道女といわず、若い神学生といわず、舞台上に登場する人物達を次々に手にかけ、陵辱し、目を覆いたくなるような破廉恥なばか騒ぎを繰り広げていたからだ。

バレエ・カンパニーの主宰者であり、独裁者として思い通りに生きたディアギレフ⁴⁾ に捧げるオマー

1) ロシア名はセルゲイだが、フランス風にセルジュと名乗ることの方が多かった。

2) 公演は2009年10月13日から17日まで行われた。

3) 副題にも含まれている振付家名は Cherkaoui / De Frutos / Maliphant / McGregor の4名である。

4) 興行主として類い稀な先見の明を備えていたディアギレフは、無名の芸術家の才能を早くから見極めるのに長けており、『春の祭典』のような傑作の誕生にも欠くことの出来ない役割を果たした。しかし同時に、公私混同甚だしく、自分の気に入りのダンサーを特別に引き立て、歴代の主席振付家は同時に彼の愛人でもあった。

ジュである以上、彼の私生活もかくやと思わせるような乱痴気騒ぎを繰り返すことには、それなりの正当性があるだろう。しかし、過剰に生々しく、下品なまでに淫らな描写を行うのに、なぜ史実通りの「興行主とバレエ・ダンサー」の衣装や演出ではなく、わざわざカトリックの聖職者達に似せた法衣を着せねばならなかったのだろうか。一体なぜ、これほどまでに辛辣なやり方で、カトリックの聖職者達を愚弄しなければならないのだろうか⁵⁾。カトリック教徒でなくとも目をそむけたくならないような舞台上での陵辱の数々の背景には、どのような事件が現実发生过っていたのだろうか。

この論考では、デ・フルトスの該当の問題作について芸術的・審美的視点からの考察に取りかかる以前に必須の作業として、まずは1960年代の第二バチカン公会議の前後でカトリック教会あるいは法王⁶⁾という存在が迎えた大きな転換点について取り上げねばならないだろう。そして、近年先進諸国で次々と公になり、大きな社会問題として取り沙汰されるに至ったカトリック教会のスキャンダル、とりわけ聖職者にあるまじき性的虐待の諸事件について、主要な事例についてその経緯を明らかにする必要があるだろう。すなわち、各国の諸事件はいつごろから、どのような形で白日の下にさらされたのか、被害に遭った人々はいったいどのくらい存在しているのか。これらの事件に対して、教会側はどのような対応をとってきたのか、といった点である。

それとともに、20世紀後半以降世界各国で次々に明るみに出てきた信じがたいほどの数の性的虐待事件を経て、欧米ではカトリックという宗教あるいはその組織（教会）のとらえられ方がどのように変化していったのか。またその結果、絵画や映画といった芸術作品においてどのような形で表象されるに至ったのか。それらの概略を踏まえつつ、考察を進めてゆきたい。

I 第二バチカン公会議以前とそれ以後

1960年代に数年をかけて行われた第二バチカン公会議（1962-65）では、様々な改革が議論され、そして実現されることになった。『教会憲章』では聖職者至上主義が否定され、『典礼憲章』ではミサの式次第にも大きな変革がもたらされた。すなわち、それまでのミサはラテン語であげることになっていたのを、第二バチカン公会議の決定以後は、各国で、その地の言語で執り行っても良い、と変更されたのである。

もっとも、ミサの式次第はラテン語で行われなくなってからも、言葉は違えどあらゆる国で（ほぼ）同じ形式で行われているから、その国の言葉がわからなくても式次第を理解し、いつも通りにミサに与

⁵⁾ デ・フルトスの作品同様、聖職者たちを題材にとりつつも、ブベニチェク（Bubeniček）の“Faun”（2012）は全く対照的で、ひとりの聖職者の心の葛藤が厳肅な雰囲気の中で真摯に描き出されている。（音楽は主に『牧神の午後への前奏曲』で、ディアギレフがニジンスキーに振付を委嘱して完成した『牧神の午後』と共通。）主人公（神父）は聖職者として自らに課された職務や規律・規範と、神学生への許されざる愛情との間で心ひき裂かれ、混乱し、懊悩する。峻厳で誇り高い神父が人間の弱さを露呈し、惑い、苦しむ姿は観客に強い印象を残した。ただし、本論考では教会に対し批判的立場をとる作品を中心に上げるため、この傑作は考察の対象外とする。

⁶⁾ 通常カトリック教会内では「教皇」の名称が使われるが、この論考では一般名称として使用されている「法王」を用いる。

ることは少しも難しくない。

とはいえ、聖書の朗読や神父の説教などは、やはり聞いて理解できるにこしたことはない。実際、東京やパリなどの大都市では、母国語以外の言語でのミサは珍しくなく、観光客のみならず外国人居住者も多いパリでは市内のあちこちで、英語によるミサはもちろん、韓国語やポーランド語によるミサ⁷⁾まで行われている。しかも、各教会のそうしたミサ情報は今日ではインターネット上を検索することによって実に簡単に手に入る⁸⁾ようになった。

このように、現地語で執り行うミサは、カトリック教会によるキリスト教の普及に一役買ったともいわれるが、まさにこの各国語版ミサ式次第のために、カトリック教会の権威が弱まった、と感じる芸術家もあったようである。

たとえば、2013年5月下旬まで東京で大回顧展が行われていた画家フランシス・ベーコン（Francis Bacon）は、1950年代までに法王をテーマにした絵画を数々描いている。最初の出発点はベラスケスの絵画で、構図等もよく似ていたが、その後、ベラスケスのオリジナル絵画から離れて、椅子に座ってあくびをしている（もしくはあられもなく大口を開けて叫んでいる）法王を描いている。ところが、1960年代に入ると、法王のテーマはぶつつりと途絶えてしまう。

ベーコンがなぜ、法王に関するテーマへの関心を急速に失ってしまったのかについて、前述の第二バチカン公会議の影響があったのではないかとする考察がある。すなわち、ミサ式次第が各国語で執り行われるようになり、それまでカトリック教会が持っていた荘厳さや権威といったものが失われた以上、権威を否定し、打破することを目指すベーコンには十分な意味を持たなくなったのではないかと、という推察である⁹⁾。

第二バチカン公会議終了からさらに10年後の70年代後半には、より過激で悪趣味な画面で法王への侮辱を行ったドイツの写真家、ユルゲン・クラウケ（Jürgen Klauke）の例もある。彼の連作、“Grüße vom Vatikan¹⁰⁾”（1976/77）では、撮影者である彼自身が裸体に法王のものと思いき緋のマントだけをまとい、玉座の側で錫杖を持ちながら、側近の聖職者を相手に狼藉と放蕩の限りを尽くしている。2011年4月のケルン国際美術見本市（Art Cologne）で展示・即売されていた4枚の写真（連作）は極めて

7) カトリック新聞オンライン（2013年6月7日付記事「韓国のカトリック536万人」）によれば、韓国のカトリック信者は昨年12月末の時点で536万人（人口の10.3%）、一方日本では、カトリック中央協議会HP掲載の統計資料「カトリック教会現勢2012」によると43万6千人あまりと、1%にも満たない。なお、ポーランドは欧米諸国の中でもpratiquant（洗礼を受けた信者であるのみならず、毎週ミサに与る習慣を持つ人を指す）の数が大変多い、といわれている。

8) ホームページでは特に断り書きはないが、パリ8区のマドレーヌ教会では毎日曜夜の礼拝で、信仰宣言や主の祈り等、主なもののみラテン語で斉唱している。また、L'annuaire de la messe traditionnelleというサイトを紐解くと、ミサのすべてをラテン語で行っている教会（またはそれに準ずる組織）のリストは欧州のみならず、北米やアフリカ、アジア地域にわたっている。

9) 保坂健二朗、「フランシス・ベーコンについての断章、いくつか」、『フランシス・ベーコン』展覧会カタログ、東京近代美術館編、2013年、p.13。なお、会場内のキャプションには公会議について、カタログよりも具体的な説明が加えられてあった。

10) アーチスト自身の公式ホームページの英語訳はRegards from the Vatican、もしくはGreetings from the Vaticanである。

高解像度のカラー写真で、等身大の巨大なサイズにプリントされている。

「聖職者達の破廉恥な振る舞い（性的放埒）」が舞台上で、生身の人間の身体を用いて動的に表象されているのに比べれば、その衝撃の度合いはいささか減ずるかもしれない。とはいえ、写真の粒子の細かさは肌の肌理までくっきりと映し出しうる水準であり、大きな十字架と緋のマントの鮮やかさ、そして許されがたい悪ふざけにうつつを抜かす悪童のような表情は、21世紀の観客の目にも十分なインパクトを持っている。法王や神父の存在を貶めるものとして、70年代当時どれだけの反響を巻き起こしたのか、想像に難くない。

ベーコンが法王を題材にするのをやめた理由のひとつが、第二バチカン公会議にともなうカトリックの平準化であり、法王の権威失落であったとすれば、その10年後のクラウケの手法は、法王の権威を完膚無きまでに地に落とす直接的な愚弄であり、法王への侮辱が露わになっている。

II 1970年代アメリカ：聖職者の大量離脱に伴う人員の確保とその代償

ところで、ドイツでクラウケが法王を侮辱する作品を作っていた70年代、アメリカにおいてカトリック教会の聖職者たちの振る舞いはどのようなものであったのだろうか。

ここで、2003年1月にニューヨーク・タイムズがはじき出した戦慄すべき統計と、それに付随する1970年代の問題点について触れておこう。

日刊紙ル・モンド社が刊行する *Le Monde des Religions* という雑誌の2005年1-2月号は、“Sexualité: Des interdits à l'érotisme sacré” というテーマに基づく特集号であった。本論考ではその中の記事の一つ、Tincq の “Le scandale des prêtres pédophiles”¹¹⁾ からの引用を出発点にアメリカおよび欧州での事例を取り上げ、評釈を進めてゆく。

記事の冒頭には教会組織に壊滅的な打撃を与えた、アメリカの事例が挙げられている。

Aux Etats-Unis, selon l'Institut de droit criminel de New York, plus de 4 % des prêtres (45000) ont fait l'objet de poursuites pour abus sexuels.

En janvier 2003, le *New York Times* estimait à 1205 le nombre de prêtres condamnés, sur un total de 4268 accusés. Les deux tiers avaient été ordonnés dans les années 1970, à une époque d'hémorragie du clergé où il fallait remplir en urgence les séminaires et les écoles catholiques.

Pour l'Eglise américaine, c'est une catastrophe morale et financière : des diocèses (Portland, dans l'Oregon, Tucson, dans l'Arizona, ...) ont déposé leur bilan, des immeubles ont été vendus, des paroisses fermées (à Boston) afin d'indemniser les victimes. En 2002, les évêques ont adopté une Charte de protection des mineurs qui décrète une tolérance zéro – une seule plainte suffit

¹¹⁾ Henri Tincq, “Le scandale des prêtres pédophiles”, dossier “Sexualité: Des interdits à l'érotisme sacré”, in *Le Monde des Religions*, janvier-février 2005, p. 38.

pour renvoyer un prêtre – , promet une collaboration totale avec la justice et une indemnisation généreuse.

年度は明らかにされていないが、アメリカでは4万5千人の神父のうち、4パーセント以上が性的虐待の科で訴追を受けており、記事内に引用されている2003年1月のニューヨーク・タイムズによれば、2003年までに訴追を受けた（accusé）聖職者4268人のうち、1205名が性的虐待の科で有罪を宣告（condamné）された。そして、そのうちの3分の2までが、1970年代に叙階を受けたという。70年代には聖職者の大流出が起こったために、神学校やカトリック教会付属学校のポストを緊急に埋めなければならなくなったというのだ。

この記事には、なぜ70年代に聖職者の大量離職が起こったのかは詳述されていないが、60年代から70年代半ばのサイゴン陥落に至るまで、時代はまさにベトナム戦争への反戦運動の機運が大いに高まったところであり、同時に、世界各地の先進諸国でそれまでの価値観や権威を否定する若者文化が席卷し、大きな社会ムーヴメントを巻き起こしていたころでもある。たとえば、フランスでは1968年に5月革命という大きな出来事があったわけだし、日本でも安保運動が盛んになって、大学が学生によって占拠され、授業が行えなくなったりした。

このような時代背景にあっては、窮屈な規律に縛られた聖職者の生活を否定し、大量の離職者が出たとしても、それほど不思議はあるまい。

そうした大きな社会変動や変革の只中であっても、神学校や教会付属学校に進学する生徒数は急激に減少するわけではなかろうから、当然、ポストを急いで充当しなくてはならないだろうし、そうした緊急時には、人物や志の吟味などは二の次になってしまい、結果として千人を超える大量の聖職者が有罪判決を受けるような事態に至った、と推察することは十分可能であろう。

虐待の詳細が明らかにされたのは事件の後、何十年も経ってからになるが、結果はアメリカのカトリック教会にとって、道徳上のみならず財政上も破滅的なものであった。オレゴン州のポートランド、アリゾナ州のタクソンといった司教区では、被害者への賠償を行うために破産申し立てを余儀なくされ、建物を売却して資金を用意したり、ボストンではなんと複数の小教区が閉鎖されるに至った¹²⁾、ということだ。

なお、70年代アメリカで起こったジョン・ゲーガン元神父にまつわる事件とその顛末については、“Our Fathers” という映画が史実にかなり忠実に取り上げているので、第V章で再度考察の対象とする。

¹²⁾ 同記事, p. 38.

Ⅲ 1990年代以降のカトリック教会聖職者のスキャンダル：性的虐待被害者の顕在化

<オーストリア>

さて、今度は欧州に目を向けてみよう。

最も早くから性的虐待の問題が表面化した国の一つがオーストリアであった。

Quant à l'Eglise d'Autriche, son crédit est très atteint depuis que, dans les années 1990, l'archevêque de Vienne lui-même, le cardinal Hans-Hermann Groër, avait été mis en cause par d'anciens séminaristes et des novices d'une abbaye bénédictine où il enseigna dans sa jeunesse. Le Vatican avait dû exiger sa démission en 1995. Et, en octobre 2004, c'était au tour de Mgr Kurt Krenn, évêque de Sankt Pölten, accusé de couvrir un trafic de photographies à caractère pédophile au séminaire de son diocèse, d'être écarté.

首都ウィーンの全ての司教区を統べる大司教のハンス・ヘルマン・グローアー（Hans Hermann Groër）枢機卿そのひとが、若い頃教鞭をとっていたベネディクト会の大修道院の元神学生や元修道士（修道女）から訴えられて、法廷に引き出されている。その結果、バチカンには彼に辞職を勧告¹³⁾しなければならなくなった、とある。

他の諸国の事件事例が長い間隠蔽され、法に問われることがほとんどなかったのとは異なり、教会ごとの小さな教区¹⁴⁾を管轄する司祭ではなく、大司教という高位にある枢機卿に対する訴追であるだけに、バチカンまでを巻き込んだ対応が恐らく早期に必要なものだと推察できる。

<フランス>

Tincqの記事によれば、古いカトリック教国のフランス、アイルランド、そして前述のオーストリアのような国にも、幼児性愛者の聖職者が引き起こす危機が及んでいる。1995年以来（2005年の記事発行の時点ですでに）フランスでも40人ほどの神父が有罪判決を受けているという¹⁵⁾。

La crise du clergé pédophile a aussi atteint des pays de vieille catholicité comme la France, l'Irlande ou l'Autriche.

En France, depuis 1995, une quarantaine de prêtres ont été condamnés. En 2001, Mgr Pierre

¹³⁾ 同記事, p. 38.

¹⁴⁾ たとえばパリの行政区分という6区には、日本でもよく知られた代表的なものだけでもサン・ジェルマン教会やサン・シュルピス教会など、複数の教会がある。

¹⁵⁾ 同記事, p. 38.

Pican, évêque de Bayeux, accusé d'avoir couvert un prêtre pédophile (en le mutant de paroisse), a été condamné par le tribunal correctionnel de Caen à trois mois de prison avec sursis pour « non dénonciation d'atteintes sexuelles sur mineurs ». L'évêque a invoqué en vain le secret professionnel.

さらに 2001 年には、幼児性愛者の神父をかばったバイウー（Bayeux）市司教ピエール・ピカン（Pierre Pican）が、カーン（Caen）市の裁判所で執行猶予付の有罪判決を受けている。罪状は、「未成年への性的被害を通達しなかったこと」である¹⁶⁾。

確かに、90年代の半ば頃から *Le Monde* 紙などでも、神父から幼少時に受けた性的虐待に関する大見出しの記事をしばしば目にするようになった。しかしながら、それが果たして背後に莫大な数の同様の事例を従えた中のほんの一部にすぎないのか、それとも、本当にたまたま、そのような悪徳神父が犯罪を起こしたもののなかは、個別の記事だけを読んでいた当時にはまだそれほど明らかではなかったのである。

<ベルギー>

ベルギーでは、デュトゥルー（Dutroux）事件以来、幼児性愛者の主任司祭が巻き起こす数々の醜聞が大変な反感を呼んだ、とある。

Depuis l'affaire Dutroux, les scandales de curés pédophiles ont aussi déchaîné les passions en Belgique. Le cardinal Godfried Danneels, archevêque de Malines-Bruxelles, a été traduit en justice en 1998 pour non-dénonciation d'un prêtre, aumônier de jeunes, qui fut condamné pour attouchements et viols.

前述ピカンの例と同様、1998年にはゴットフリート・ダネールズ（Godfried Danneels）枢機卿が、性的暴行により有罪となった司祭について報告をしなかったかどで起訴されている。

<アイルランド>

後述のル・モンド紙の記事にもある通り、アイルランドでは「教会またはバチカンの長女（Fille ainée de l'Eglise/Vatican）」と呼ばれるフランスにもまして、カトリックへの帰依が強い。この国で起こった性的虐待事件は、どのような経緯を辿っているだろうか。

En Irlande, depuis dix ans, des centaines d'adultes ont fait connaître les sévices sexuels dont

¹⁶⁾ 同記事, p. 38.

ils avaient été victimes dans des institutions catholiques : collèges, orphelinats, centres d'apprentissage, maisons de redressement, hôpitaux. En 2002, Eglise et Etat ont signé un accord pour indemniser ces victimes – en échange d'un abandon de leurs plaintes – pour une somme de 500 millions d'euros, dont un quart sera versé par les congrégations religieuses.

(Tincq の上記記事発行の 2005 年に至る) 10 年の間に、カトリック教会が運営する学校、孤児院、病院等の施設で性的被害を被ったという成人が 100 人ほど名乗りを上げた。とりわけカトリックへの依拠が強いこの国では、2002 年 1 月に教会と国家が、これらの被害者に賠償をすることに合意した。ただし、それは訴えを起こさない、という条件と引き替えであったという。

また、2009 年 12 月 11 日付け¹⁷⁾ の *Le Monde* 紙の記事、Stéphanie Le Bars の “Le Vatican face aux abus sexuels dans l'Eglise d'Irlande” によれば、未成年者に対して行われた性的暴行に関して、320 もの訴えがあったこと、それらはアイルランド法務省による調査によって白日の下にさらされたことなどから、枢機卿が(当時の)法王ブノワ 16 世に呼び出されていること、などが書かれている。

同記事によれば、調査を遂行した判事の名が付された「マーフィー報告書 (Le rapport Murphy¹⁸⁾)」では、1970 年代から 2000 年代初頭までの間に司祭達によってなされた性的虐待が詳らかになった際、教会の態度について、容赦のない追求を行っているということだ。Le Bars の同記事によれば、1970 年代以来暫時減少中とはいえ、アイルランド人の 46 パーセントまでが週に 1 度はミサに出かけ¹⁹⁾、大多数の学校が今も教会によって維持されている、という国である。これらの犯罪の暴露は教会関係者によって「Tsunami = 津波」とまで表現される水準であるのみならず、国民全体に大変な衝撃を与えた、というのも当然のことであろう。

IV ベネディクト (ブノワ) 16 世, 存命中に退位へ

2010 年 3 月 25 日付け AFP の記事²⁰⁾ によれば、ニューヨーク・タイムズ紙がベネディクト 16 世を次のように批判している。1950 年から 1974 年までの間、アメリカのウィスコンシン州で 200 人余りの聴覚障害児を強姦したと疑われているアメリカ人神父ローレンス・C・マーフィー (Laurence C. Murphy) について、当時まだ枢機卿であったベネディクト 16 世は彼の過去を他のバチカンの責任者達と共に隠蔽した、というのである。

その一方で、同記事の末尾近くには、ベネディクト 16 世は 2001 年に沈黙の壁を破り、繰り返され

17) ただし 2013 年 5 月閲覧の時点では、この記事には 2010 年 3 月 17 日に改訂が行われた、との記録がある。

18) フルネームは Yvonne Murphy で、後述する幼児性愛者の神父 Laurence C. Murphy とは別人である。

19) もう少し間遠にミサ参加は月に一度だけ、という実践者まで含めると、その割合は 65%にも達している。

20) 記者名無記名, “Le pape accusé d'avoir couvert les abus sexuels d'un prêtre américain”, 2010 年 3 月 25 日付けの記事。AFP サイト上で 2013 年 5 月閲覧。

らの「恐ろしい行い」を糾弾したこと、また、幼児性愛者の事案について必ず報告し、若年者との接触を避けさせるべし、と司教に厳しいお達しを出した際の主導者であったことなども書き添えられている。また、ダブリン地域の100人もの子供達に何十年にもわたって繰り返されてきた虐待について、「恥ずべき事」と述べたことや、もうひとつ別のアイルランド内幼児性愛スキャンダルに関与した司教の解任を了承したことも書かれている。とはいえ、同記事の結びは、これらの対応では被害者達は全く満足していない、という結論であった。

そしてついに今年、2013年2月には法王のベネディクト16世自ら、存命中の退位を表明するに至っている。事実上の終身職である教皇が存命中に退位するのは「600年ぶり」、1378年から1417年まで、ローマとアビニョン（フランス）に教皇庁が分裂した大シスマ（教会大分裂）以来となる未曾有の出来事だという。

もちろん、この退位という結論は、ひとつ性的虐待事件の隠蔽のみが理由だったわけではなく、主たる要因はむしろ、バチカン内での権力闘争やマネーロンダリング疑惑であっただろうし、それら全てのスキャンダルの幕引きを図るためにも、退位は不可避の手段であっただろう。

しかしながら、1990年代にはじまるカトリック教会内の性的虐待事件の表面化が、それまで「当然」とみなされていたバチカンのやり方や方法論を揺るがしたことは間違いあるまい。

V 映画に描かれたカトリック神父の性的虐待事件

<スペイン映画『バッド・エデュケーション』>

日本でも2005年4月に公開された、ペドロ・アルモドバル監督の『バッド・エデュケーション』（La Mala Educacion/Bad Education, 2004）は、少年時代にカトリック系寄宿舎で生活していた2人を軸に展開する²¹⁾。

主人公を性的虐待の被害から守るため、意に反して悪徳司神父と関係が続けた「友人」は、長じてから件の悪徳神父に再会し、糾弾する。しかしその神父は、「虐待ではなかった、お前を愛していたのだ」といった弁解をする。

映画ではその後も込み入った筋が展開するが、ここで最も重要なことは、年端も行かぬ少年や児童をだまし、言いくるめ、口止めをして相手の意に染まぬ行為を強いながら、ぬけぬけと「愛」を口にする神父の側のずるさであろう。この映画では、そうした卑怯な大人の姿が直裁に描かれている。

体格の上でも議論においても圧倒的優位にある大人が、抗うための言葉も力も持たない若年者に手をかけ、思いのままにするという卑劣きわまりない幼児性愛の犯罪者は、矯正施設においても最もさげすむべき犯罪者としてみなされるという。実際、次の章でも取り上げるジョン・ゲーガン（John Geoghan）元神父は、アメリカで130人以上の性的虐待にかかわったとされており、収監中、同じ房の

²¹⁾ 登場人物の詳細は推理ドラマの側面も持つ映画の根幹に関わるので、ここでは割愛する。

殺人犯（終身刑）から暴行を受け、亡くなっている。

＜日本未公開アメリカ映画：Our Fathers＞

アメリカ映画 *Our Fathers* (2005)²²⁾ では、まさに上述のジョン・ゲーガン元神父の事例が中心に据えられている。ボストン司教区を揺るがしたこの事件に題材をとり、原告側弁護士（圧力に屈せず、神父から性的虐待を受けた被害者の救済に努めた）と原告側被害者をはじめ、ゲーガンの上司にあたるバーナード・ロウ枢機卿ら、実在の人物と出来事を実名通りに描いた作品である。従って、映画の末尾ではゲーガン受刑者が絞殺されるシーンも含まれているし、ロウ枢機卿が退任に追い込まれた結末も描かれている。

舞台となる時代は1970年代から80年代にかけてである。映画製作は2005年と比較的新しいものの、デ・フルトスの舞台で表象されていたような直接的な性的行動描写は一切ない。たとえば父を亡くしたばかりで心弱くなっている少年をゲーガン神父（当時）が車で連れ出し、そっと太腿に手をのせるところまでで終わり、そこから先のことは描かれない。あるいはまた、行為に至る寸前の「命令」シーンまでで、実際の行為は全く見せないかわりに、成人してもトラウマに苦しめられ続けている男性に当時のレイプの模様を詳らかに語らせる、といったやり方での、常に間接的な表象である。

しかし、怯える子供の様子を目の当たりにし、涙ながらに過去の被害体験を男性が語るのを聞くと、観客（視聴者）はその恐怖をより切実に感じることになるだろう。

ある家庭では、男性兄弟7人全員が同じゲーガン神父（当時）から性的虐待を受けており、母親は被害を受けていた当初からすでに、カーボンコピーを手元にしっかりと残しつつ、神父の上司に被害を告げ、対応を求めている。しかし、懸命の訴えも空しく、その報告は握りつぶされ、泣き寝入りに終わっていた。また、事件後長い時間が経過したあとの訴訟の準備で、原告側の弁護士が手に入れた精神病院の診断書によれば、問題行動を起こしているゲーガンは今後も同様な問題を繰り返し起こしうる、と予見されていたにも関わらず、当時の上司は彼を別な教区に配置転換させただけで、聖職の剥奪はしなかった。そして、このような「隠蔽体質」ゆえに、性的虐待の被害者の数が無駄に増えることになった、と原告側弁護士は厳しく追及する。

確かに映画の中のロウ枢機卿は、ゲーガン神父（当時）の人権や将来を守るため、というよりも、「臭いものにふた」をし、教会のスクandalを世間の目から隠すためにはいくらでも資金を投入する、といった姿勢を露にしている。

しかし、ヴィクトール・ユゴアの『ああ無情』、ミュージカルでは『レ・ミゼラブル』のタイトルで有名になった作品中、教会から山ほど銀器を盗んで姿をくらまそうとして警察に捕まったジャン・バルジャンに、神父は何と言っていただろうか。彼の罪を問うどころか「対の（銀の）燭台をお忘れですよ」と言って、大切な燭台までも差し出し、真人間になるために使いなさい、と手渡してくれたのではなかつ

22) テレビドラマから映画化。日本未公開のため字幕はないがDVDの形で市販されている。

たか、そして、その期待に応じて、ジャン・バルジャンは徳の高い市長として、市民に愛されるまでに至るのである。

醜聞を人の目から隠した、といえはその通りなのだが、キリストの教えに従い、「人を許すこと」を信者に説く神父が、同僚や部下に相当するものを「裁く」こと、まして司直の手に引き渡すなどということが極めて難しいのも事実であろう。

おわりに

罪を犯した人間が心を入れかえ、再犯せずに真つ当な道を歩んでいけるのかどうかは、それほど確実な話ではない。しかし、先進諸国の制度では、犯罪者に対する矯正施設が常に準備されている。つまり、刑罰の重さによって刑期は違っていても、一度罪を犯した者も更生できる、ひとは変わる、という理念に基づいているわけである。

まして、「信じることで救われる」という教えを説くキリスト教の膝元では、罪をおかした神父を単純に俗世に放り出し、教会から放逐しただけでは、少しも教会の務めを果たしたことにはならないだろう。

しかしながら、本論考を通して各国の被害状況をつぶさに観察するならば、被害に遭ったケースが限られた数のレア・ケースであった、とは到底言いがたいことが判明する。この事実直面したとき、今日のカトリック教会が単に「権威を失墜」したにとどまらず、信者からの信頼をも大きく損うことになったのもある意味当然と言うべきであろう。さらには、デ・フルトスの舞台が描き出す身の毛のよだつような怪物的神父の姿も、いたいけな被害者達にとっては、むしろより現実に近いものだったかもしれない、とも考えられよう。

なお、なぜこのような性的虐待がカトリックの聖職者の間で起こり、次々に被害が明らかになっているのかについては様々な議論があり、しばしば原因として取り沙汰されるのが、カトリック特有の独身主義である。Bernadette Sauvaget の記事²³⁾によれば、「独身と純潔」を重んじるのは仏教とカトリックのみ、とある。確かに、カトリックと同じキリスト教でも、プロテスタントなど、他の宗派では妻帯が可能である。カトリックの神父は家庭を持たず、子供も持たないから、カトリック教会がらみの性的虐待事件が後を絶たないのだ、という意見も繰り返し聞かれる²⁴⁾。

ただし、これらの問題に関する考察は、「犯罪はなぜ起こるのか」という全く別な議論になるため、別な機会に譲ることとしたい。

²³⁾ Bernadette Sauvaget, "La chasteté est-elle tenable?", dossier "Sexualité: Des interdits à l'érotisme sacré", in *Le Monde des Religions*, janvier-février 2005, N°9, p. 34-37.

²⁴⁾ 日本ではあまり知られていないが、実はアフリカ大陸の諸国など、妻帯しなければ一人前と認められがたい国では、上記 Sauvaget の記事にも書かれている通り、カトリックの神父でも例外的に妻帯が認められている。